

グローバル時代に対応した経済学部学生のための 英語到達目標値の策定および教授方法についての

基礎的研究～英語を効率的に学習するために～

経済学部 国際経済学科・言語文化教育学

○ 教授 ^{すえひろ み き}末弘美樹 教授 ^{せらはるこ}瀬良晴子 教授 B. ブレズナハン

キーワード

英語到達目標値, 内容言語統合型学習 (CLIL), ヨーロッパ共通参照枠 (CEFR)
グローバル時代, 英語教授法, Can-Do List, 記述的評価方法

研究概要

日本は外国語教育を含む言語政策に失敗し続けている。1991年の「大綱化」以降、各大学では全学的にあるいは学部ごとに独自の教育方針を示すことで、他大学との差別化を図り始めた。そこでまず本学では、H31年度から国際商経学部がスタートすることもあり、英語力の目標値とその教授法について策定し直した。その結果、本学経済学部の英語目標値（次期中期計画）を、グローバルマインドとローカルマインドを同時に持ち合わせ、「兵庫県」について英語で世界に発信できる学生の養成を掲げた。それは兵庫県が"A Japan in Miniature（日本の縮図）"と呼ばれ、産業・自然・歴史文化など様々な分野で日本を代表することからである。また現在、副専攻のCOCなどで地域を学んだり、防災のプログラムなどで海外と連携しようとしていたりしているが、英語教育はこれらと有機的に結びついていないこともその理由である。そして、評価指標と教授法については、文部科学省が既存の資格検定試験とヨーロッパ共通参照枠 (CEFR) の対応関係を検討し始めたことから、Can-Do Listを指標とした記述的 (descriptive) 評価方法を導入することを決めた。さらに、具体的な内容言語統合型学習 (CLIL) を取り入れた授業展開を理解するため、日本CLILの第一人者である池田真教授（上智大学）と経済学を英語で教授している川西諭教授（同大）お呼びして、経済学のワークショップ型模擬授業を体験した。これらの取り組みを通してわかったことは、今回掲げた目標値に向け語学力を計画的に高めるためには、意図的に目標、内容、指導法、教材が選択され設計されたCLILという教授法による授業展開が非常に有効であること、またそのためには英語の専門家と専門科目の教員が協働して、カリキュラムから取り扱う教材や教授法（反転授業やアクティブラーニングの取組み）まで入念に積み上げていく作業が必要であるということだった。

アピールポイント

H31年度から国際商経学部がスタートする。5つのコースのうち全て英語で経済学の授業を行い、経済学士を出すコースができる。このグローバルビジネスコースのみならず、副専攻プログラムや看護・理学・工学など他学部とも連携し、広く英語での広報を担い将来英語を用いて兵庫県やそれぞれの地域で活躍できる人材を養成することに繋げていくための教材づくりが、今後の課題である。今年度は、新たに特別研究費を獲得して、バーチャルリアリティ (VR) を取り入れた英語教材を試作し、その教育効果を測る予定であるが、できればこの教材開発を産学連携で取組みたい。

